

プノンペン便り

សំបុត្រភ្នំពេញ

プノンペン便り No.3

2009年8月30日 須山 勝彦

アンコールワットへの道

先日、家族がアンコールワットの観光旅行に来たので、シェムリアップまでバスで会いに行った。国道6号線を314Km 5時間半の旅である。プノンペンを出発して暫くは車、バイク、自転車の交通量が多くスピードを出せないが、1時間ほどでコンポンチャム州に入る。コンポンはマレー語のカンポン=船着場、チャムはイスラム教徒の意味である。沿道にはモスクが建ち、男性は礼拝用の帽子を被っていた。首都からこんな近くにイスラム教徒が多く住む地域があるとは知らなかった。

メコン川の増水のため、道の両側が湿地帯になった景色が暫く続く。国道は土盛りしてあるので所々に橋がかかり水を逃がすようになっている。荷車や家畜も往来する1本道が続き、出発して3時間で中間地点のコンポントムに着く。ここから先は車や人の往来も少なくなり田んぼと牧草地の中を舗装道路が一直線に走る。まだ田植えをしているところもあり、稲の収穫は11月ごろである。

雨季にはメコン川が増水し、その水がトンレサップ湖へ流入し湖の面積が3倍に広がる。現在7割位で11月に最大になるそうだ。

トンレサップ湖はいわゆる氾濫原と表現したらよい景色で、立木が水没し樹冠が水面から出ている。毎年繰り返される自然現象だが、植物や水生生物にとってはかなり厳しい(種の多様性の少ない)環境だと思った。

カンボジア人考

5月下旬に電子実験室を調査したところ、10年前に国際機関の水質調査で実験機材がほとんど使われずに保管されていることが分かると、漁師の協力をかけて調査・整備した。先生方に



アンコールワットの夜明け



牛やオートバイが引く荷車が行き交う国道

□ 使い方を教えるよと声をかけたところ、若い教師 2 人が乗ってきた。1 人は 1 回来ただけで来なくなったが、もう 1 人は毎週来てくれた。教師は授業のない時は学校に居る必要はないが、彼は後期の授業が終わる 8 月初めまで週 1 回非番の日に来てくれた。彼は電子科で学生に教える傍ら大学の経営学修士コースで学んでおり、特別勉強熱心なのかもしれない。学生の中にも午前中は当校の電子科で学び、午後は別の大学で別の学科を学んでいるもの、働きながら学んでいるものも多い。カンボジアの学校制度は午前、午後、夜間でコースが違うので、大学の掛け持ちや仕事との掛け持ちも可能だが、それにしても努力家が多い印象を受けた。最近の経済発展により、学歴や資格があると条件の良い職に就ける可能性があるのも皆一生懸命になるのだと思う。

私の個人的感覚だが、カンボジアが他国と比べてフラットな(封建的身分制度などに囚われない)社会であるように思う。日本が戦後、それ以前の体制や権威がすべて否定され、皆貧しい状態から経済復興を果たしたように、カンボジアも不幸な内戦ですべてが無くなり、ようやく平和が戻り、皆同じスタートラインに立ち努力しているのではないだろうか？

太陽光発電の技術

電子科チーフの C.S. が「再生エネルギー利用」という科目を教えており、前任のボランティアが太陽電池パネルを買った。太陽光発電はどちらかというと電気科の領域で、電気科チーフの M.M が同じ科目を担当しているが理論しか教えていない。2



人は昔からの同僚だが授業で協力するという発想はないようだ。ようやく手に入れた太陽電池パネルを電気科にも貸してやったらと言いたいが、前任者の貢献なのでそこまでは言えない。まずは C.S. の実技を支援することから始めた。

K.P.氏と彼の開発したソーラーカー

C.S. に業者を教えて貰い、JICA の活動費で太陽光発電の制御装置を 200 ドルで 2 台買った。1 台は米国製、1 台はカンボジア製でその業者が開発に関わっているようだった。社長の K.P. はカンボジアで初めてソーラーカーを作った人物で、彼との技術交流を今進めている。K.P. からインバータで正弦波を出力するマイコンのプログラムを知らないかと聞かれたので、前任者が残した機材を使い早速開発した。2 週間後に試作機が出来たと彼に連絡したら、翌日飛んできた。校長の許可を貰い、週 1 回彼と技術交流をすることにした。この技術には当校の先生方も興味を持っているので、学内・学外のいろいろな人が連携するプロジェクトに持っていったら面白い。

日本でインバータというと蛍光灯を高周波で点灯させ、低電力で明るくする技術であるが、電化が進んでいないカンボジアではバッテリー(直流)から交流(AC220V)を発生させるインバータや逆の作用をするバッテリー充電器のローカルニーズがある。カンボジア製のインバータが 20 ドル程度で売られているが出力が滑らかな正弦波でなく角ば

った方形波のためテレビの雑音が多い、扇風機が良く回らないという不具合がある。カンボジアで技術開発ができれば、タイやベトナム製を凌駕できると、夢が膨らむ。